

主 題：ピレモンへの手紙から学ぶ 1 –ピレモンという人物–
聖書箇所：ピレモンへの手紙 1–7節

このようにみことばを皆さんとごいっしょに学ぶことが出来るすばらしい特権を心から感謝します。今日は「ピレモンへの手紙」から学んでいきましょう。ご存じのように、この手紙は25節しかありません。でも、聖書の中にしっかりとその位置を占めています。ということは、この25節の中に、神が私たちに知らせる真理があるということを私たちはしっかりと覚えるべきです。いつも、聖書の終わりの方に来てこのピレモン書を飛ばしてしまいがちですが、皆さんとともにこの書を2回に亘って学んでいきたいと思えます。今日はその第1回目です。

1. この手紙について

1) 著者 : パウロ 1、19、21節

これらの箇所で、著者がパウロであることを明らかにしています。また、パウロはこの手紙をだれに書いたのか？1節と21節から「ピレモン」へ宛てた手紙であることが分かります。

2) 個人的な手紙

これは25節しかない非常に短い手紙ですが、パウロの個人的な手紙です。そのことは皆さんが読んで分かる通り、ピレモンの奴隷であったオネシモについて書かれたものです。

3) 獄中書簡

また、この手紙はローマの獄中で書かれました。エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙と同じように獄中で書かれました。そのことに関しては、使徒の働き28:16、30–31にその様子が書かれています。「28:16 私たちがローマに入ると、パウロは番兵付きで自分だけの家に住むことが許された。…:30 こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、:31 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」、

4) みことばの実践を促す 17、20、21節

また、パウロはこの手紙で何を教えようとしたのか？それは「みことばの実践を促す」ことです。

5) 奴隷制度を知る

また、この手紙を通して私たちはこの当時の奴隷制度を少し知ることができます。

2. パウロについて 1節

1) キリスト・イエスの囚人であるパウロ

この手紙の書き出しは「キリスト・イエスの囚人であるパウロ」となっています。書き出しに「囚人」ということばを使っているのはこのピレモン書だけです。あと12のパウロ書簡がありますが、冒頭の書き出しは次の通りです。

a) 使徒 : Iコリント書、IIコリント書、ガラテヤ書、エペソ書、コロサイ書、Iテモテ、IIテモテなどの書き出しは「私は使徒である」となっています。

b) しもべ : ローマ書、ピリピ書

c) しもべ・使徒 : テトス

d) 肩書きなし : Iテサロニケ、IIテサロニケ

e) 囚人 : 「囚人」とは「縛る」という動詞から派生したことばです。だから、このことばの中には現在獄中にある自分の苦難、苦しみを「恵みである」と捉え、そして、福音宣教に自分が縛られたことをイエス・キリストに感謝し、また、そのことを「誇りに思っている」と、そのような思いでパウロは「囚人」ということばを使ったのではないかを思われます。使徒9:15–16にはこのように書かれています。「:15 しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人にはわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。:16 彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」、主はパウロを選んで福音宣教の器として遣わすと、そのことがここに記されています。しかし、その働きには苦しみ、困難が伴うということも同じように書かれています。そのことに関して、パウロはピリピ1:12–21にこのように記しています。「:12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音を前進させることになったのを知ってもらいたいと思えます。:13 私がキリストのゆえに投獄されている、ということは、親衛隊の全員と、そのほかのすべての人にも明らかになり、:14 また兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことにより、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆に神のことばを語るようになりました。:15 人々の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいますが、善意をもってする者もいます。:16 一方の人たちは愛をもってキリストを伝え、私が福音を弁証するために

立てられていることを認めています。:17 他の人たちは純真な動機からではなく、党派心をもって、キリストを宣べ伝えており、投獄されている私をさらに苦しめるつもりなのです。:18 すると、どういうことになりますか。つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでます。そうです、今からも喜ぶことでしょう。:19 というわけは、あなたがたの祈りとイエス・キリストの御霊の助けによって、このことが私の救いとなることを私は知っているからです。:20 それは私の切なる祈りと願いにかなっていません。すなわち、どんな場合にも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにも死ぬにも私の身によって、キリストがあがめられることです。:21 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です。」、パウロがこのピレモンへの手紙の冒頭で、自分を指して「キリスト・イエスの囚人」だと言った大きな意味を、パウロは様々な箇所私たちに教えています。このパウロからピレモンに宛てた手紙です。

3. ピレモンについて 1-2節

パウロは、ピレモンについてこのように記しています。

1) 同労者

「私たちの愛する同労者ピレモンへ。」と。ピレモンのことを「同労者」と呼んでいます。これは身分の上下や主従の関係ではなく、同じ立場で、同じ使命のために働く共働者のことです。ギリシャ語では「シュネルゴス」と言います。パウロはこの「同労者」ということばをローマ16:3でも使っています。「キリスト・イエスにあって私の同労者であるプリスカとアクラによろしく伝えてください。」と。

a) パウロの伝道によって救われた

ピレモン書19節を見るとそのことが伺い知れます。「この手紙は私パウロの自筆です。私がそれを支払います—あなたが今のようになれたのもまた、私によるのですが、そのことについては何も言いません。—」と。

b) エペソ伝道の困難なときにパウロを助けた

また、パウロがエペソ伝道の働きを為している非常に困難なときにパウロを助けたと言われています。

2) 家にある教会 = 初代教会

a) ピレモンの家で集会（礼拝）がもたれていた

2節の後半に「あなたの家にある教会へ。」と書かれています。初代教会においては、今私たちが礼拝をもっているこのような建物はほとんどありませんでした。多くはクリスチャンの家に集まって礼拝をもっていたのです。ですから、「家にある教会」と呼ばれたのです。ここから、ピレモンの家でも礼拝が持たれていたということを私たちは知ることができますし、また、ピレモンの家はコロサイにあったことがコロサイ書4:9から知ります。「また彼は、あなたがたの仲間のひとりで、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。」、このピレモンの家の教会はコロサイ教会の発祥であると言われ、紀元5世紀頃まで保存されていたと言われますが、現在はありません。この「家にある教会」、初代教会の多くがこのような教会でした。そのことに関して、みことばは私たちにこのような教会があったことを教えています。

b) アクラとプリスカの家にある教会

このことに関してはローマ16:5に「またその家の教会によろしく伝えてください。私の愛するエパネトによろしく。この人はアジヤでキリストを信じた最初の人です。」とあり、Iコリント16:19に「アジヤの諸教会がよろしくと言っています。アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています。」と書かれています。

c) ヌンパの家にある教会

これに関してはコロサイ4:15に「どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。」と書かれています。

d) ヨハネ・マルコの母マリヤの家の教会

また、使徒12:12では「こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。」とあります。

当時は、このような「家の教会」でした。私たちはこのことをよく理解できます。私たちの教会も奈良に伝道所があります。ここはそのために建てられた建物ではありません。私たちの教会の兄弟姉妹の家を開放していただいてそこで礼拝をもっています。まさに、「家にある教会」です。

また、多くの牧師や宣教師の方々が開拓伝道をしたときは、自分の家を開放してそこを礼拝の場所として提供していたことを私たちは様々な資料から伺い知ることができます。

3) 姉妹アピヤ

彼女はピレモンの妻であったろうと言われています。

4) 戦友アルキボ

ピレモンの家の教会の牧師でした。コロサイ 4 : 17 に「アルキポに、「主にあつて受けた務めを、注意してよく果たすように」と言ってください。」とあります。ピリピ 2 : 25 には「しかし、私の兄弟、同労者、戦友、またあなたがたの使者として私の窮乏のときに仕えてくれた人エパフロデトは、あなたがたのところに送らねばならないと思っています。」と書かれています。

4. パウロが感謝したこと 4-5 節

このようなピレモンでしたが、パウロはこのピレモンについて二つのことを感謝しています。そのことは 4-5 節で知ることが出来ます。ピレモンたちがいた当時のコロサイの教会は、非常に「信仰と愛とに富んでいた」教会であったと言われています。そのことがコロサイ 1 : 4 にこう書かれています。「それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。」と。ピレモン 4-5 節を見てください。「:4 私は、祈りのうちにあなたのことを覚え、いつも私の神に感謝しています。:5 それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛について聞いているからです。」と書かれています。この 5 節はコロサイ 1 : 4 のことばとよく似ています。

1) ピレモンの信仰

パウロはまず、ピレモンの信仰について感謝をささげています。「主イエスに対してあなたが抱いている信仰」とあります。この「対して」ということばはギリシャ語では「プロス」という前置詞が使われています。これは「信仰の目標、対象を表わす前置詞」です。だから、ピレモンが抱いていた信仰の対象、信仰の目標は主イエス・キリストであるということを明らかにしているのです。

a) 家を開放して集会をしていた 2 節

このことからピレモンの信仰を推し量ることができます。

b) 「信仰の交わり」を守っていた 6 節

6 節「私たちの間でキリストのためになされているすべての良い行いをよく知ることによって、あなたの信仰の交わりが生きて働くものとなりますように。」、ここから、ピレモンは信仰の交わりを守っていたことが分かります。この交わりは神との交わり、そして、兄弟姉妹との交わりを含んだものです。この「交わり」はギリシャ語では「コイノニヤ」ということばが使われていますが、それはイエス・キリストの贖いのわざを通して、三位一体の神との交わり、愛する兄弟姉妹との深い交わりを表わしたことばです。

パウロはピレモンの信仰を感謝しましたが、この「信仰」について、

・「信仰」： 私たちも信仰によって救われました。「信仰」は「神と神のことばに対する全き信頼」を指します。

a) 旧約では ⇒ 信仰によって人間は義と認められました。創世記 15 : 6 には「彼は【主】を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と、アブラハムの信仰が記されています。また、ハバクク 2 : 4 にも「見よ。彼の心はうぬぼれていて、まっすぐでない。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」と書かれています。旧約においても、信仰によってのみ人間は義と認められたと、そのことを私たちは知ることが出来ます。

b) 新約では ⇒ 私たちが今生きているこの時代も含めた新約の時代です。ギリシャ語では「信仰」は「ピステイス」、また、「信じる」は「ピステューオー」ということばが使われています。この二つのギリシャ語は新約聖書の中で 240 回以上使われています。いかに「信仰」「信じる」ということばが聖書の至る所に散りばめられていることか、私たちはそのことを知ります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」と、よくご存じのヨハネ 3 : 16 のみことばです。また、ガラテヤ 2 : 16 でパウロはこうに言っています。「しかし、人は律法の行いによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちがキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行いによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行いによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」と。

行いによって救われる者は一人もない、ただただ、救われるのは「信仰」だけであると、私たちはそのことをみことばによって教えられます。「信仰」は一人ひとりの全人格から出る信頼です。知識だけの信頼ではなく、また、感情だけの信頼ではなく、また、そのことを決意をしたという意志の信頼でもなく、知識も感情も、そして、私たちの意志も含んだすべて、全人格による信頼、これが「信仰」です。また、この「信仰」も神の恵みです。私たちが信じるその思い、行為はすべて主の恵みによるのです。パウロはピレモンのこのような信仰に感謝をささげています。

2) ピレモンの愛

もう一つ、パウロは「ピレモンの兄弟愛」について感謝をささげています。「すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。」とあります。ここにも「対して」という前置詞が出て

来ます。ここではギリシャ語の「エイス」という先のとは違う前置詞です。これは「愛の方向を表わす」前置詞です。ですから、ピレモンが持っていた「愛」は、すべてのクリスチャンに対する愛であるということがこのことばからも明らかに知ることができます。

a) あなたの愛から多くの喜びと慰めを受けた 7節

そして、7節「私はあなたの愛から多くの喜びと慰めを受けました。」、ピレモンの愛は行動の伴った愛であることが、ここからも分かります。ピレモンは非常に愛に富んだ人物であったことを私たちは知ることが出来ます。そして、「愛の実践」について、私たちはみことばからこのように教えられています。

・愛の実践 : Iヨハネ3:16-18「:16 キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。:17 世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。:18 子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」、ヨハネはここで、「愛」について、また、「愛の実践」について、私たちに教えます。

3:16 : 犠牲の伴った愛であると言います。それは「神の愛」です。

3:17 : あわれみの心をもってと言います。相手を思いやる心をもってということです。

3:18 : 行いと真実をもって、実際的な愛の行動をヨハネは言うのです。愛には行いが伴わなければならないということです。

ピレモンはヨハネがここで教えている愛を、恐らく、実際の信仰生活の中で行なっていた人物であったはずですが、だから、パウロはピレモンの愛を主に感謝したのです。この5節「それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。」を別のことばで言い表わすなら、「すべての聖徒に対するあなたの愛は、主イエスに対してあなたが持っている信仰から生まれて来るものです。」となります。パウロはピレモンの信仰と愛について主に感謝しました。

5. ピレモンの働き 7節

実際に、ピレモンはどのような働き、また、どのような奉仕をしていたのでしょうか？7節の後半に「それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによってかづけられたからです。」と書かれています。ピレモンに関して書かれている箇所はここしかありません。聖書の他の箇所でピレモンについて言及している箇所は一切ないのです。ですから、私たちはこのピレモン書の1節から25節を通して、ピレモンがどのような働きをしたのか？どういう思いをもって奉仕をしたのか？そのことを見ていきたいと思えます。7節の最後に「…かづけられたからです。」とありますが、英語の聖書ではREFRESHということばが使われています。辞書を引くと「元気にする、生気を与える」という意味です。このことばから、

1) Iテサロニケ 5:11 : 「ですから、あなたがたは、今しているとおり、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」、恐らく、ピレモンはこのような働きをしたのでしょうか。

a) 聖徒たちを励ます : 弱っている心を持つクリスチャンを、困難の中にあるクリスチャンのその心を奮い立たせるという働きをしたのでしょうか。

b) 徳を高める : これは他のクリスチャンの霊的成長を促す働きです。このような働きをしたことが伺い知れます。

2) ヘブル 10:24-25 : 「:24 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。:25 ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」、

a) お互いに愛と善行を勧め合う : ピレモン書の5~7節を見ると、恐らく、ピレモンも「お互いに愛と善行をするように」と、他のクリスチャンたちにそのような勧めを為したことを知ることができます。

b) ともに集まる : これは「交わり」です。自分の家を開放して集会のために、また、交わりの場所として提供していました。6節に「あなたの信仰の交わり」と書かれていることから、ピレモンがともに集まり、ともに交わりをもつという働きをしていたことが分かります。

3) ガラテヤ 5:13 : 「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。」

a) お互いに仕え合う : 20節「そうです。兄弟よ。私は、主にあって、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあって、元気づけてください。」、ここからピレモンもお互いに仕え合っていたことが分かります。

4) エペソ 4:2, 3 : 「:2 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、:3 平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」、

a) 謙遜と柔和 : ピレモンもこのような思いをもって様々な働きをしていたことを知ります。

21節を通して私たちは彼が謙遜と柔和の人であったことを知ります。「私はあなたの従順を確信して、あなたにこの手紙を書きました。私の言う以上のことをして下さるあなたであると、知っているからです。」と。自分を低くして相手を思いやる心をもった人物であったことを知ります。

b) 寛容 : 16, 17節を通して、彼が相手を赦す心をもっていたことを知ります。「:16 もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。特に私にとってそうですが、あなたにとってはなおさらのこと、肉においても主にあって、そうではありませんか。:17 ですから、もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。」

c) お互いに忍び合う : 17節を見ると、ピレモンがお互いに忍び合う心、忍耐する心をもっていたこと、また、忍耐する心をもって働きを為していたことを知ります。

d) 霊的一致を保つ : また、ピレモンはパウロから同労者と呼ばれています(1節)。ということは、ピレモンは霊的一致をいつも考えていたのです。集まったクリスチャンが一つになって主を称え主のわざに励む、そのことを思っていた人物だったことを、私たちはこの「同労者」ということばから推し量ることができます。

パウロはピレモンの信仰と愛について主に感謝し、また、このピレモン書を通して、私たちはピレモンがどのような人物であって、どのような思いをもって働きを為したのかを知ることができます。

6. 私たちひとり一人に託された働きとは？

さて、私たちです。私たちひとり一人は救われたときに一人ひとりに託された働きがあります。

1コリント6:20 : パウロはこのように言います。「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」、クリスチャンは全員、例外なく、神の栄光を現わすために召された者たちです。

1ペテロ4:10 : 「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」、私たちは与えられている賜物を用いなければいけないということです。そして、その賜物を用いて互いに仕え合う、そのことをみことばは教えています。

マタイ25:14-30 : 皆さんよくご存じの箇所です。

「:14 天の御国は、しもべたちを呼んで、自分の財産を預け、旅に出て行く人のようです。:15 彼は、おのおのその能力に応じて、ひとりには五タラント、ひとりには二タラント、もうひとりには一タラントを渡し、それから旅に出かけた。:16 五タラント預かった者は、すぐに行って、それで商売をして、さらに五タラントもうけた。:17 同様に、二タラント預かった者も、さらに二タラントもうけた。:18 ところが、一タラント預かった者は、出て行くと、地を掘って、その主人の金を隠した。:19 さて、よほどたってから、しもべたちの主人が帰って来て、彼らと清算をした。:20 すると、五タラント預かった者が来て、もう五タラント差し出して言った。『ご主人さま。私に五タラント預けてくださいましたが、ご覧ください。私はさらに五タラントもうけました。』:21 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』:22 二タラントの者も来て言った。『ご主人さま。私は二タラント預かりましたが、ご覧ください。さらに二タラントもうけました。』:23 その主人は彼に言った。『よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。』:24 ところが、一タラント預かっていた者も来て、言った。『ご主人さま。あなたは、蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めるひどい方だとわかっていました。:25 私はこわくなり、出て行って、あなたの一タラントを地の中に隠しておきました。さあどうぞ、これがあなたの物です。』:26 ところが、主人は彼に答えて言った。『悪いなまけ者のしもべだ。私が蒔かない所から刈り取り、散らさない所から集めることを知っていたというのか。:27 だったら、おまえはその私の金を、銀行に預けておくべきだった。そうすれば私は帰って来たときに、利息がついて返してもらえたのだ。:28 だから、そのタラントを彼から取り上げて、それを十タラント持っている者にやりなさい。』:29 だれでも持っている者は、与えられて豊かになり、持たない者は、持っているものまでも取り上げられるのです。:30 役に立たぬしもべは、外の暗やみに追い出しなさい。そこで泣いて歯ざしりするのです。』

5タラント、2タラントのしもべ ⇒ 賜物を用いたしもべ

1タラントのしもべ ⇒ 賜物を用いなかったしもべ

1タラントのしもべは与えられた賜物を使わなかった、地に隠したのです。彼をイエスは何と呼んでいるか? 『悪いなまけ者のしもべだ。』とこのように呼んでいます。

さて、皆さん、「賜物が私たちひとり一人にあるかないかが分からないから、主の働きをすることが出来ません」ではないのです。私に与えられている賜物が何であるかが分からなくても、働きはできるのです。そして、それぞれがその働きをすることによって、私たちに与えられている賜物が明らかにされます。私たちは救われたとき、ひとり一人に霊的賜物が与えられました。みことばはこのように教えます。エペソ4:7「しかし、私たちはひとりひとり、キリストの賜物の量りに従って恵みを与えられました。」

そうです。救われたときに一人ひとりには霊的賜物をいただいたのです。だから、私たちはこの霊的賜物を土の中に隠してはいけません。与えられている賜物を用いるのです。それが主が一番喜ばれることです。なぜなら、このしもべに対して主はこのように言われているからです。『よくやった。良い忠実なしもべだ。』と。私たちはこのことを覚えて、また、主にお会いするその日が一日一日近づいていることを覚えて、私たちに託されている働きをしっかりと為していきたいものです。

9月に入ったので、今日からバプテスマクラスを始めます。このクラスで使っているテキストは「バプテスマ準備・入会クラス」というものです。そのテキストの6項目に「VI. 浜寺聖書教会、教会員の責任」があって、そこにはいくつかの項目があり、その一つに「成長」があります。抜粋して記します。

「成長 : クリスチャンの終着点は、救いでも、バプテスマを受けることでも、教会員になることでもありません。主に似た者に変えられて、完全な状態で主を永遠に称えることなのです（ピリピ 3：10-16）。ですから、このキリストに似た者となるという希望をもつ者は、キリストと同じように、聖い者になることを切に求める者です（Iヨハネ 3：3）。

キリストに似た者になるには、キリストがどのような方だったのかを正しく知らなければなりません。また、私たちが抱える様々な問題をどのように正しく解決し、神に喜ばれる生涯を歩むことができるようになるかを知らなければなりません。そのために、私たちはみことばをしっかりと学ぶ必要があります。聖書を通して、神のみこころを知り、神の命令に従順に従っていくことが必要なのです。

同時に、私たちには同じ主を愛するクリスチャンとの交わりが必要です。私たちは一人でこの成長を成し遂げることはできません。ひとり一人のクリスチャンに与えられている聖霊の賜物を用いて、互いに助け合い、成長を促し合うことが必要なのです。それゆえに、クリスチャン同士の交わりを拒むようなことがあってはいけません。むしろ、積極的に交わりに参加し、兄弟姉妹を愛し、互いに助け合い、教え合うことが求められているのです。